食品機械で日中交流の為に来日時のインタビュー記事

食品機械で日中交流

巨大な人口を抱える中国の食品産業は発展めざましく、各国の食品や食品機械メーカーにとって魅力的な市場。中国農業機械化科学研究院（北京市）は、農業機械や農産品の加工などを研究する政府機関で、約3000人の研究者を擁している。現地での食の安全対策や食品機械の現状や将来について、副院長を務める李樹君氏に聞いた。

資源と技術、相互補完を

中国農業機械化科学研究院副院長 李樹君（リ シュジュン）氏に聞く

―中国は農業大国と言われています。

「農機はこれまで小型が主流だったが、国の施策で農業経営の規模が拡大しており、今後、大型化が進む。08年の農業機械のGDP（国内総生産）は約2000億元（約3兆円）、ここ数年で一年当たり25%成長。農業の近代化が重要課題になっている。全人口の60%を占める農業人口を30%まで下げれば近代化とは言えない。そのため、政府は農家が機械を購入する際、補助金を提供するなど機械化を進めている」

―食品機械の現状は。

「08年の食品機械と包装機械のGDPは、1200億元（約1兆8000億円）だが、農業機械より発展スピードが速い。中国では85年以降、農産品加工のニーズが出てきた。90年代からは1次加工からミルクなどの2次加工へ発展。日本企業が食品関係の製造拠点を中国につくるなど日中の良い関係につながっている」

―食品機械産業における今後の日中の関係は。

「08年にマグネテックジャパンと研究院の傘下にある企業が合弁で北京中日磁石科技を設立した。同社には中国と日本の架け橋になるよう期待している。中国は人と資源が豊かで、日本は高レベルの技術がある。互いに補完し合い交流を深めればよい成果が出るはずだ」

関係構築が発展のカギ

現在の中国市場では、高性能な欧州製の食品機械が優勢と言われている。一方、日本メーカーはアフターケアなど管理を含めた総合的な技術力を強みとしており、中国市場でのシェア拡大を狙っている企業も多い。技術移転といった中国のニーズにこたえるなど、互いに「ウィン・ウィン」の関係を築くことが、両国の食品産業の発展のカギとなるだろう。

（川端・田窪香菜）

検査センター設立時講演会の際の写真